って奈良時代の比較的大規模な掘立柱建物、土器類や木製品類と共に二点の木簡を発見した。木簡が出土したのは、遺跡の南西隅で、当時の低湿地に面した微高地の縁部である。(1)は遺物包含層中より、(2)は掘立柱建物（SB〇四）の柱穴埋土中より出土した。

8　木簡の釈文・内容

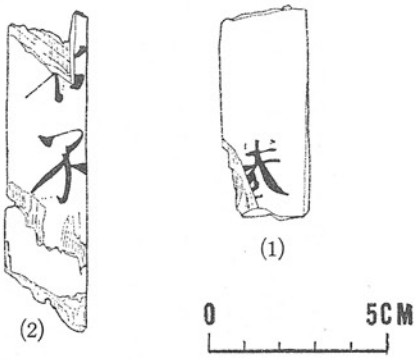
(1)　□〔巻カ〕

(59.5)×24×8.5　081

(2)　□〔不カ〕不

(92)×(22.4)×6　081

二点共に両端を折られた細片であり、字数も少いので内容を伺うことは困難であるが、(2)は「不」の文字が二字連続する可能性もあり、習書木簡の一部とみられる。



9　関係文献

藤枝市教育委員会『秋合遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（一九八五年）

（磯部武男）

静岡・郡（こおり）遺跡

1　所在地　静岡県藤枝市立花二丁目

2　調査期間　第三次調査　一九八四年（昭59）一〇月～一九八五年一月、第四次調査　一九八四年一一月～一九八五年一月

3　発掘機関　藤枝市教育委員会

4　調査担当者　八木勝行・鈴木隆夫・磯部武男・池田将男

5　遺跡の種類　集落跡・官衙跡

6　遺跡の年代　弥生時代中期～平安時代・中世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（静　岡）

郡遺跡は、旧東海道に沿って延びる藤枝市街地（宿場）から少し東側にはずれた立花地区に位置している。

瀬戸川のつくる低湿地に面した沖積微高地の縁辺部に広がる弥生時代中期から中世に及ぶ大規模な複合遺跡として知られ、その名称

の示すとおり、遺跡の分布地付近には「郡」・「西益津」などの地名が残されているところから、古くより駿河国益頭郡衙の所在地として有力視されてきた。しかも、多数の墨書土器の出土によって遺跡の内容が明らかになった史跡志太郡衙跡（御子ヶ谷遺跡）とは瀬戸川を挟んでわずか二・五㎞ほどの隣接した位置にあるところから、両郡の在り方をとらえるうえでも注目される遺跡となっている。

遺跡は、東西六〇〇m、南北四〇〇mの広範囲に及ぶものと推定され、周辺部まで開発が迫ってきているところから、遺構の広がりと性格を把握する目的で一九八一年以来発掘調査を実施してきている。すでに第二次調査（昭58年）において「益厨」と記した墨書土器を発見するなど、予想どおり益頭郡衙と深く関連するものであることが物証によっても明らかになった。こうした中で第三次（立花D地区）調査・第四次（立花F地区）調査においても、「益厨」と記した墨書土器とともに木簡が出土し、さらに郡衙跡という推定を裏付けることとなったものである。

一　第三次調査（立花D地区）

遺跡のほぼ中央部を横断する市道西益津一四五号線拡幅工事に伴って事前に巾一m、長さ一三〇mにわたって発掘調査を行った結果、多くの柱根・礎板とともに一・四m×一・六mの掘形をもった井戸（SE〇六）を発見した。井戸は杉の厚板による五五㎝四方の井戸枠を丁寧に組み、三～四段（高さ八〇㎝）に積み上げている。

木簡は、この井戸の覆土中より鉄斧、横櫛などとともに一点出土している。

井戸周辺部には掘立柱建物群の存在が予想されるが、調査範囲の関係から規模や配置状況まではとらえられない。

二　第四次調査（立花F地区）

立花D地区より北側へ約一五〇m離れた地点で小規模な農地改良工事が行われ、耕作土を取り除いたところ遺物が発見されたため緊急に発掘調査（四八〇㎡）を実施した。

遺跡の範囲としては北端部に近い位置と予想されたが、表土下四〇㎝ほどの浅い部分で弥生時代から奈良時代に及ぶ六条の溝状遺構が発見された。

このうちL字形に折れまがって延びる二条の溝（SD二六・二七）は、それぞれ幅一m、深さ五〇㎝ほどの規模で、中に廃材の板や杭で水止めや縁部の補強を施して長期にわたって水路として使用していることが確認された。

水路中からは投棄された遺物が多量に出土し、墨書土器・木簡・木札を含めて、土器・木製品（曲物・皿・槽・ハシ・紡織具・鎌・刀子）・祭祀具（斎串・剣形・刀子・人形・馬形）・土馬・手捏土器・土錘・砥石など種類も多く認められた。

出土土器の年代からみて、溝SD二七は、八世紀前半代にほとんど埋没し、その後、八世紀中頃に、ほぼ同じ位置にSD二六が掘り

なおされ、八世紀末頃まで使用されていたものと考えられる。

木簡はSD二七から二点、SD二六から一三点出土しているが、板絵馬に転用されたものを除いて、ほとんどが付札とみられる点で特徴をもっている。また、SD二六からは墨書土器が二六点（整理中）出土し、「益厨」が八点と多くを占めている。「益大」・「少領」などの郡司の官職名に関わるものも含んでおり、志太郡衙出土の墨書土器群に共通する内容をもつ。このことからも、発見された区域が駿河国益頭郡衙に含まれることは明らかで、中でも水路によって区画された範囲には、厨家や貢進物資の管理などの機能を果した施設があったことが推測される。

8　木簡の釈文・内容

第三次調査（立花D地区）

井戸SE〇六

(1)　□□□□□□□□□。（穿孔）　(177)×40×2　081

中央部を穿孔した板の左側に寄せて記載され、文字の大きさや列も不揃いで文意も解しにくい。習書ないしは呪符の可能性もある。

第四次調査（立花F地区）

溝SD二七

(1)
・「〈物マ里五□（戸カ）宇治マ角末呂」　199×26×6　033
・「〈□□五斗　」

(2)
「〈□□（戸主カ）刑×　(54)×15×9　039

溝SD二六

(3)
・□六日□牛等胴七月十二日丁□（女カ）。（穿孔）
□□□□（郡カ）□□□□□（廿カ）八日□□□□□（九カ）（九日カ）
・『　（穿孔）。　』　170×73×2　011

(4)
□□□□（給カ）□□□（益カ）
益□　92×49×8　081

(5)
下　矢田マ□（子カ）毛人　(177)×24×3　059

(6)
「〈□月廿八日□（丈カ）□□」　282×25×8　033

(7)
□田人」　(93)×(22)×5　081